

見方・感じ方を教える詩の授業

— 中学一年の授業から —

高 見 よ志子

はじめに

〇〇という詩を教えるのに時間をどれだけかけられるか。
どのようにしてイメージを描かせたか。

主題に迫るためには、どこに力点をおいたか。

関連する詩として何をどう与えたか。

詩の授業をめぐって、このような会話がよく交わされる。作品のもつ世界に、生徒をどのように近づけ、鑑賞したものをどのように発表せしめるかの工夫に関心が集まるのが一般的である。授業では、何がうたわれているかということ、つまり、素材やイメージの理解に関することがらが、かなり丁寧に行われるのである。

このような詩の授業はそれなりに生徒も興味を持って臨み、一つ一つを豊かに享受していくのであって、否定するものではない。しかし、このような作品至上主義ともいうべき学習が陥るのは、指導の観点が一面的であるという点である。それは、詩を詩たらしめている要素の認識をどこかで教えないままに、鑑賞学習を繰り返しているということである。

また一方では、解釈ぬきの音読や暗誦、まるごと多くの詩を享受

させることの重要性も唱えられている。ここには解釈では及ぶことのできない詩精神に感覚的に迫ろうとする姿勢がある。

ところで足立悦男氏はその著「新しい詩教育の理論」で、従来の鑑賞指導への批判から、見方（認識）の詩教育を唱えている。どこに力点を置くのでもない漠然とした扱い、また、どの観点をも包括する焦点化しきれない扱いを疑問視し、「詩で教える位相」を次のように説いている。

現在の詩教育では詩論の基礎的な原理面の指導がよい。詩論はふつう、解説文（小・中）評論文（高）教材として扱われているようであるが、詩教育のねらいでもって位置づけられる必要がある。詩作品の評釈、解説、鑑賞文といったものでなく、文字通りの詩の原理にふれる詩論の教材化がのぞまれる。というのも、詩の原理のある部分が、現実認識の仕方、その方法論という点で、魅力的な教材価値をもっていると考えられるからである。端的に言えば、すぐれた詩論の教材化によって、現実認識の仕方を「詩で教える」ということになるか。

そして、「新しい関係の発見」という認識方法をとりあげ、比喩の学習指導を紹介している。私は今回この論に立つて、自分の従来の授業に欠けていた「新しい認識の発見―比喩」を学習の観点にすえて、指導してみたいと考えた。

平易な詩論から

詩を学習する生徒の意識はどうであろうか。先般、教育学部の深川先生と共に行った調査では、興味深い結果がでている。それは、詩の授業を好む生徒の約65%がその理由を「表現のよさが授業でわかる」とし、嫌う生徒の大部分が「むつかしくてわかりにくい」と敬遠していることである。この両極に相反するかに見える反応こそ、実は詩の原理の一端を物語っており、詩こそ「新しい関係」の発見を教えることのできる分野なのだという方向を示唆しているように思われるのである。

詩が日常を越えた新しい認識の発見であるがゆえに、ある生徒にとってはおもしろいのであり、また別の生徒にとってはむつかしくてわかりにくいのである。従って「わかりにくい」という印象が、なるほどの首肯する発見へと変化することが、詩の学習の楽しみでなからうか。乱暴かもしれないが、むつかしいと感じることイコールおもしろさだと考えたい。そして、むつかしさの多くが比喩に結びついていることを思うとき、「比喩」を指導のポイントにした授業をしておきたいと考えたのである。

さて、私の受け持つ中学一年生にはどこから入ればよいだろうか。幸い、詩人の高田敏子さんは「詩の世界」(ポプラ社)に、生徒・児童向きに「自由な心の持ち方」と題して平易な詩論を展開しておられる。少し長くなるが、生徒に配布したプリントでもあるので、次

に掲げる。

わたくしたちが生きていく上で必要とする知識・約束・一般的な礼儀や習慣、そうした常識を守ることが大切といえるでしょう。でも、心の持ち方は、常識だけにしづられてしまつてはつまりません。「鳥の飛ぶのはあたりまえ」「花の咲くのもあたりまえ」と、ただそれだけの見方、思い方しかできなかったらどうでしょう。その人は思うたのしみをもてない人、なんにも考えない人、感動のもてない人、ということになってしまいます。(中略)常識にしがたれない心をもちましょう。知識や学問も、そこに、その人の心の働きが加わって、はじめて生きたかたちになるのです。発見や発見も空想の心を働かせるところから生まれます。

詩は発見、発見であるといわれていますが、それは、新しい意味の発見、見方、思い方の発見発見です。そしてまた、ことばの使い方の発見発見でもあります。

なんでもなく、あたりまえになっているものにも、もう一度目をむけて、それについての意味や価値を思い、たしかめて、もつとよい見方、思い方をさがすことが、詩の使命といつてもよいでしょう。(――線は筆者)

詩作する人の立場から詩の理論を説き明かしている文章である。新しい認識と比喩機能について、まずこの文章で理解させ、実際に作品を通して再確認させるという展開を考えたのが次の授業である。

授業の実際

單元名 自由な心の持ち方

ねらい。詩は自由な心から発した、ものの見方・感じ方の発明発見であることを理解させる。

。比喻表現というのはことばの使い方の発明発見であることを理解させる。

教材 高田敏子「自由な心の持ち方」

三好達治の詩「土」「本」 竹中郁の詩「外科医」

展開

T 前の時間までに「朝のリレー」(谷川俊太郎)「小川のはとりで」

(小野十三郎)を読みましたが、詩とはいったい何でしょうね。

(詩とは?と板書)

P 自分の心を表現したもの。

P 短いことばで自分の感動を表わしたもの。

T そうね。心とか感動とかは大切なことね。そのあたりを高田敏子さんという詩人がうまく言っていますよ。読みながら「詩」を説明したところに赤鉛筆でマークしてみなさい。

(先述の資料プリントを配布。生徒のマークした箇所を次のように要約して板書。)

詩とは

- 新しい意味の発見
- 見方・感じ方の発明・発見
- ことばの使い方の発明・発見

T これまでに学習した詩で、このことが言えますか。

P はい、朝がつぎつぎと世界中の人にやってくるのをリレーととらえているところ。朝にリレーすることじゃない。

P 世界中の人が平和な朝を迎えられるように願って、チームワー

クの必要なリレーにたとえていたところが発明発見です。

(その他、細かい指摘がある)

T そうでしたね。ただ心や感動を書いたものではなく、見方の発明発見があることです。次にこのことを、別の短い詩でみていきましょう。(「土」を板書)

どこに発見があるの?

P (口ぐちに) ヨットのようだ。

T じゃ、言いかえてみます。

蟻が・蝶の羽をひいて行く

ああ・美しいなあ

P だめだあ。(全員)

P 詩じゃない、あたりまえの見方。

(以下 かわいそうだ・力強いなあ、の言い換えも否定される。)

T では、ヨットのようだ、がなぜいいの?

P 羽の形や色が想像できる。

P 白か黄色。紋白蝶かな、ヨットだから……。

P どんな感じを出そうとしたの

T 地面が海で、蝶がヨットの帆みたいに見えて印象的だった。

(土という題との関連から自然の営みに注目させる展開も考えられるが、ねらいがばけぬようここでとめる。)

T もう一つ、これまた三好達治さん。

(板書。生徒はもうクイズを解くようなまなざしでチョークの手元を見ている)

P 白い蝶を白い本に見たてたところ。

土 三好 達治

蟻が 蝶の羽をひいて行く

ああ

ヨットのようだ

× 美しいなあ
かわいそうだ

力強いなあ
•あたりまえの見方

P 本のページを開いた形と蝶の羽をひろげた形が似ている。

P それから、最後の二行。それはこうやって水平線を縫っているところ……うーん、先生、黒板に出てかいてもいいですか。

(描きながら)

ひらひら上にあがつたり下ったりして飛んでいるようすです。

T そうですね。こんなおもしろい発見があるから詩なのです。では、そのようすを思いうかべながらみんなで読みましょう。

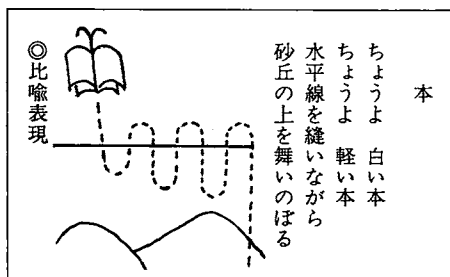
(生徒音読)

T 以上のように、ものを別のものに見立てる言い方、たとえる言い方を比喩表現といいます。その比喩も詩では、新しい発明発見でなくてはおもしろくないのです。ちようがヨットのように見えること、「あがつたりさがつたりひらひら」ではなくて、「水平線を縫いながら」であること、「白い軽い本」であること、などですね。
(「比喩表現」と板書)

次に竹中郁の「外科医」のプリントで与えて朗読した。

白熊が外科医、仔熊が看護婦、かわいそうなペンギンは手術台上の僕の比喩であることがすぐにわかった。

ところで、ペンギンは南極に棲息するのであるから「ここは北極だ」というのはわからないと異議をとなえる者がでてきた。「では、



この詩は詩としてはつまらないか。

という問いかけに

教室は騒然とした。

生徒の意見を要

約すれば、北極に

ペンギンを配して

もかまわない、か

わいそうな手術台

の僕は、どこかユ

ーモラスで、白熊

に比べてはるかに

無力なペンギンこ

そふさわしいこと、

そこに見方の発見

があるということ

だ。ペンギンの棲

息地を問題にして

いる詩ではなく、

何を北極のように

見たのか感じたの

かを追求していく

と、「手術台のぞつと

するような恐怖」の

比喩がわかれば、「氷

点下四五度」声まで

氷結する」「血管は

極光を

◎比喩「北極」ぞつとする恐怖

外科医 竹中 郁

ここは北極だ！

僕は雪の上で臥なければならぬ

扉をあけて手術衣をきた白熊が

仔熊をつれてやってくる

ここは氷点下四五だ！

鉄とコップとピンセットと

時としては僕の声まで氷結する

かわいそうなペンギン！

鋭い刀の一閃に

僕の血管は極光を吹きあげる

かわいそうなペンギン！

僕は臥ている間に

すっかり繃帯の雪にうずまってしまった

つめたい墓石！

ここは北極だ！

と、「手術台のぞつとするような恐怖」の比喩だとわかった。全体的な比喩がわかれば、「氷点下四五度」声まで氷結する」「血管は極光を吹きあげる」「繃帯の雪」等の細部のイメージはひとつひとつ取り上げなくともよいと思われる。北極のイメージで恐怖が描かれている

ことを念頭において、しっかりとした声で音読させること、また範読を聞かせることで授業を結ぶことにした。

一時間のうちに文章一つと詩を三つ読ませたことになるが、詩作品そのものの鑑賞学習の立場で言うならば、与えずぎ／という叱責を受けそうである。しかし、見方・感じ方の発明発見という点に的をしばった授業としては、中一でも充分に理解したと思われる。

おわりに

この「発明発見」ということばは文芸一般に応用され得るものである。ちなみにその後、ある初夏の日「夏密柑剥くや拇指怒らせて」という句を紹介し、「見方感じ方の発見は？」と問いかけると、瞬くうちに挙手が増え、「拇指怒らせて」を指摘した。拇指を反らせて剥くゼスチュアがあちこちで始まった。詩や俳句・短歌の学習が「どんな情景？どんな気持ち？」の発問に導かれた分析的で鑑賞一辺倒になりやすい点を救ってくれそうだ。

なお、さまざまな比喩法については別の機会に指導したい。

(金沢大学教育学部付属中学校教諭)